

ちゃんとしたい！

○白園女子大学・講堂前

『白園女子大学卒業式』の看板。

袴姿の北山霧子（22）、森田麻美（22）、

高見加奈（22）の三人がいる。

彼女らは面白くなさそうに、正門付近に
いるいかにもリア充な仲間たちが、迎え
に来た男たちと楽しそうにはしゃいで
いるのを眺める。

霧子「なーんもなかった四年間」

麻美「わたしたちは」

加奈「がんばらなかった！」

三人「（合わせて）がんばらなかった！」

三人、虚しそうに大きくため息。

霧子「でもさ、あたし今度こそやるよ！」

麻美「なにを？」

霧子「社会人デビューよ。決まってるじゃない。
い。大学では失敗しちゃったけどさ、今度
こそ楽しくやってみせる。それで、絶対に

幸せな人生をゲットするんだ」

加奈「幸せな人生か……なんかいい響き」

霧子「でしよう？ 加奈もやろうよ」

麻美「あたしも彼氏欲しい！」

霧子「だから麻美もよ。頑張ろうよ！ 人生

はこれからなんだからさ」

麻美「そうだね……（うなずき）うん、やる。

あたしも幸せな人生をゲットする」

が、加奈はちょっと首をかしげる。

加奈「けどさ、幸せな人生って具体的にどう

いうこと？」

霧子「だから男よ、決まってるじゃない。い

い男をゲットして楽しく生きる。他に何が

あるっていうの？」

麻美はウンウンとうなずく。

霧子「とにかくさ、これからも三人で集まる

うよ。半年に一回くらい。そんでいろいろ

と報告し合おう。彼氏ができたとか、なん

かいろんなこと」

加奈「うん。まあそれはアリだね」

麻美「賛成！」

霧子「よし、やろう！　そこで、幸せを目指してがんばっていこう！」

三人「（合わせて）オー！」

字幕――と張り切ったものの、時がたつのはあまりにも速く、アツという間に七年もの期間が過ぎたのであった。

○加奈の部屋（夜）

男性生殖器型のバイブがうねうねと動いている。

それを手に持ち、しみじみと眺める 29歳になった霧子。

部屋には、やはり29歳になった加奈と麻美がいる。

三人は宅飲みの中だ。

霧子「ねえ加奈、これどんな具合？」

加奈、霧子からバイブを奪い、

加奈「霧子、やめて。勝手に触らないで」

霧子「ていうかさ、少しは恥ずかしがりなよ」

加奈「人の物、勝手に引っぱり出してなに言っ
てんの？」

と手近にあったスポーツバッグにバイブ
をしまう。そこには様々なタイプのオナ
ニーグッズが詰まっている。

霧子「それにしても加奈がオナニーマニアに
なるとはね」

加奈「マニアじゃないし」

麻美「ねえねえ、この中でどれがいちばんい
いカンジ？」

加奈「んーなんだかんだいって普通のロー
ターかな。他のはさ、何ていうの、雰囲気？
『こんなのあたし使っちゃってるうう』み
たいなカンジで、気分的にすごく盛り上が
るんだよね」

霧子「（吹き出し）もうさ、男作りなよ」

加奈「作りました。作ったうえで、男なんて
ロクなものじゃないって結論に達したの。
知ってるでしょ？ 今までのこと全部、話

してきたんだから。それよりも霧子こそ男を絞りなさいよ。なんなの五股って？」

× × ×

字幕、霧子の場合

霧子が髪の毛の薄い中年男、谷村徹（54）とセックスをしている。

谷村は、しつように霧子の体をむさぼる。

× × ×

霧子、今度は大学生風の男、堀内慎二（20）とセックスをしている。

霧子、積極的に堀内の上になり、若い男の体を味わっている。

霧子の声「そう言うけどさ、避妊もちゃんとしてるし、そこまで非難されることじゃないと思うけどな」

× × ×

元の加奈の部屋。

呆れた顔の加奈と麻美。

加奈「避妊してれば五人の男とやってもいいってこと？」

霧子「五人じゃなくて四人ですうう」

麻美「え？ そうだっけ？ 遊ぶ男は五人いるっていつも言ってたじゃない」

霧子「幸太郎クンとはセックスはしてません」
加奈「残りの四人とはしてるってことでしょ。」

それってどうなの？ ってことよ」

麻美「そういうのはダメだよ。ちゃんとした方がいいって」

霧子、麻美をギロリと睨み、

霧子「麻美、ちゃんとしなきゃいけないのはあんたでしょ。あの卓也って奴とまだ切れてないんだからさ」

×

×

×

×

字幕、麻美の場合

麻美の部屋。

阿部卓也（32）が麻美にビンタや蹴りを入れている。

麻美は、体を丸め、身を守ることしかできな
きない。

霧子の声「DV野郎なんかとはさっさと別れ

なきやダメだって！」

×

×

×

×

元の加奈の部屋

しよんぼりとした表情の麻美。

麻美「……でも、優しい時もあるから」

加奈「はい、来ました、典型的なパターン。

そりやたまには優しくなるよ。年がら年中暴力ふるう奴にくつつく奴なんていないんだから」

麻美「……」

霧子「とにかく麻美。ちゃんとしなきやダメだのはあんた」

と麻美の長袖のまくる。

そこに大きな青あざがある。

霧子「優しい男は、自分の女にこんなアザつけたりしないって」

加奈「うん、確かに」

麻美「うん……別れることは考えてる。ていうかさ、みんなもちやんとしようよ。霧子だって四人とするなんて良くないし、加奈

もこのままずっと（とバイブを見て）こればつかってわけにはいかないでしょ？」

加奈「うん……まあ」

霧子「そうだけどさ」

麻美「来年は30なんだよ。みんなで幸せになるうって、卒業以来、ずっとこの集まりを続けてきたけど、今の状態が幸せって言う？」

黙り込む三人。

霧子「そっか……もう30かあ」

麻美「いろいろあった七年間」

加奈「わたしちは」

霧子「がんばった！」

三人「（合わせて）がんばった！」

霧子「それなりにね」

三人、笑い出す。

加奈「ほんとにそれなりにだよね。がんばっ

ても、結果がこれじゃあダメかあ……」

霧子「ウン。次のステップに行かなきゃだよね。次は、もっとちゃんとしていこう」

麻美「うん、あたしもちゃんとしたい」

霧子「少しずつやっていこう。いきなりはムリでも、少しずつでいいからさ。前に進んで行こう」

加奈・麻美「うん！」

○ラブホテル・室内

霧子が磯崎竜平（32）とセックスをしている。

竜平は茶髪で日に焼けていて、いかにも遊び人風。ただセックスは抜群にうまく、霧子はよがりまくっている。

× × ×
セックスが終わり、霧子がぐったりとしている。

竜平「あのさあ霧子、悪いんだけど……」

霧子「（笑って）いいよ。あたしが出しとく」

竜平「悪い」

と霧子にキス。

霧子はウツトリとしている。

○加奈の部屋（夜）

パイプでのオナニーを終え、ぐったりとした加奈、むくりと起き上がりパソコンの画面を見る。

そこはマジメな結婚紹介所のサイト。もうすでに必要事項は記入してある。

加奈「よし、行くか」

と送信をクリック。

画面が「受付終了　ありがとうございまして」に変わる。

加奈、パンパンとかしわ手を画面に向かって打つ。

○シテイホテル・室内（夜）

霧子が村上健二（34）とセックスをしている。

淡泊なセックス。いかにも演技な喘ぎ声を出し、霧子は天井を眺めている。

×

×

×

×

二人が服を着ている。

霧子、さりげなく村上の高級そうなスーツや財布、そして財布の中身をチェック。ニンマリとする。

○麻美の部屋（夜）

部屋の隅にうづくまる麻美。暴力を受けた後だということがわかる。

離れて不機嫌そうな卓也。

卓也「おいメシ」

麻美「……」

卓也「（大きく）おいメシって言ってんだろ！」

麻美「ゴメン！」

と怯えながら立ち上がる麻美。

卓也「（大きく）俺を怒らせるなって言っただろ」

麻美、ビクツと身をすくめる。

×

×

×

×

ベッドで二人はセックスをしている。

卓也、麻美の腕にあるあざを見て、

卓也「ゴメンな。もう絶対にしないから、ホントにゴメンな」

と心から反省しているように言う。

麻美、嬉しそうに涙を流し、

麻美「うん」

と卓也を抱きしめる。

○ラブホテル・室内

霧子が谷村とベッドにいる。

谷村「キリちゃん、僕のちんちんフニヤフニヤ

だから、とりあえずナメてよう」

霧子、カメラ視線（観客の方を向き）になり「こいつはダメだ！」と首を振る。

○堀内の住むアパート・室内

裸の霧子と堀内。

堀内は、小説の原稿を霧子に見せる。

堀内「今度こそ大賞を取れる。自信作だからね。間違いない」

霧子「新作？」

堀内「いや、この前文東社に送った原稿の使いまわし。あれが一次選考を通過しないな

んて間違ってるから」

霧子「ふーん」

とパラパラと原稿を眺める。

堀内「オレさ、退路を断つために大学を辞めることにした」

霧子「マジで？」

堀内「うん。小説家になるのに学歴なんていらないしね。だから霧子さん、しばらくはいろいろヨロシク」

霧子、カメラ視線になり「こいつもダメだ！」と顔をしかめる。

○霧子、加奈、麻美のグループラインの画面
通知音と共に霧子のメッセージがスマホ
の画面に浮かび上がる。

きりこ　とりあえず二人に絞った。ていうか、

しよーもない二人を切った。

褒めて、褒めて

ピコリと加奈からの返信が表示される。

加奈 偉い👍

あたしも結婚相談所に登録したよ。

続けてもう一度加奈からのメッセージ。

加奈 出会い系じゃないよ。ちゃんとした

結婚相談所だからね(> <)

○麻美のアパート・キッチン（深夜）

スマホ画面の霧子と加奈のメッセージを

麻美が一人で読んでいる。

隣の寝室では卓也が眠っている。

麻美、卓也が寝ているのを確認してから

ポチポチとメッセージを打つ。

あさみ こっちも話し合いを始めた。

うまくいくといいな。

すぐに霧子と加奈から返信が入る。

きりこ GOOD👍！

加奈 がんばれ！ くれぐれもズルズルと
決断を先送りしちやダメだよ

麻美 「……………」

○とある駅前

人待ち顔の加奈。

そこにスーツ姿の紳士、根本伸介（40）が
やってくる。

根本「ああどうも、高見さん。お待たせしま
した」

加奈「（ニッコリ）いいえ」

根本、加奈のカジュアルな服装を見て、
根本「今日はこの前のパーティーとはまただ
いぶ雰囲気違いますね」

加奈「はい。今日はカジュアルな感じでいこ
うかと思って」

根本「うん。そういうのもいい。どうです、
まずはお茶でも？」

加奈「(ニッコリ) はい」

○公園

公園のベンチに並んで座る加奈と根本。
二人の手には缶コーヒー。

加奈、「マジで？」という目で缶コーヒ
ーを見ている。

根本「どうしました？ どうぞ遠慮なく」

加奈「は、はい」

と缶コーヒを開ける。

×

×

×

×

ベンチに座り、根本が熱く語っている。

根本「つまりね、女は家にいるべきなんだよ。

あなたもそう思うでしょう？ 男は外へ

出て戦う。そして女は家を守り、夫に安ら

ぎを与える」

加奈「……………」

根本「女は働く必要なんかない。役割の違いっ

てもんがあるんだ。あなただってそう思う
でしょ？」

加奈「でも……生活費が多いにこしたことは
ないと思いますけど……」

根本「それは違う。男は戦ってるんだから。
僕と結婚するなら、そこは理解してもらわ
ないと」

加奈「あの、失礼ですけど年収は……？」

根本「(呆れ)そんなプライベートな質問をし
ますか？」

加奈「でも結婚するなら知っておくべきこと
だと思えますけど」

根本「家計費なら、僕の給料の中からちゃん
と出すから。子どもがいないうちは、五万
もあれば十分でしょう。食費が月に二万五
千でその他も二万五千。もちろん家賃は別
に出す！」

加奈、ポカンとした表情。

根本「やり繰りをすればいいだけのことなん
だ。支出が先にあって、それに収入を合わ

せようとするのが間違いなんだ。収入の範囲内でやり繰りすればいいだけ！」

加奈、カメラ視線になり「ダメだ、こいつ！」と表情を歪める。

○ラブホテル・室内

霧子と竜平がソファでセックスをしている。霧子は上になり、激しくもだえる。

× × ×

行為が終わり、グッタリとした二人。

霧子「ねえ？」

竜平「うん？」

霧子「あたしさ、もうすぐ30になるんだよね」

竜平「……だから？」

その素っ気ない態度にガックリくる霧子。

霧子「ま、いいけどね」

と竜平に背を向ける。

竜平、笑顔で霧子の肩を掴み、振り向かせる。

竜平「どーした霧子、冗談だよ」

とキス。

竜平「俺ももう30だし、先のこといろいろ考
えなきゃなあって思ってたんだ」

霧子「え？ それって……？」

竜平「（笑顔）うん、そういうこと」

と再びキス。

竜平「でも、そうなるめちゃんと仕事を見つ
けないとな。今までみたいがいい加減にし
てたらマズいし」

霧子「大丈夫だよ。あたしも仕事続けるし」

竜平「まあね。あーあ、でもいよいよかあ。

ずいぶん遊んできたからなあ、俺も」

霧子「年貢の納め時ってカンジ？」

竜平「……？ ネング？」

不思議そうな表情の竜平。明らかに「年
貢の納め時」という慣用表現を知らない
様子。

が、霧子は気にしない。

霧子「なんでもない！」

と嬉しそうに竜平の下腹部に顔を近づけ

フェラチオを始める。

磯崎 「おい、なんだよ！」

嬉しそうにフェラチオを続ける霧子、カ
メラ視線になり、グッと親指をあげる。

○居酒屋・店内（夜）

加奈が小島哲也（35）と向かい合って座
り食事をしている。

小島は小太り。テーブルには山のような
料理が並んでいる。

小島は食べると喋るを同時に行っている。

小島 「僕はさ、女性の社会進出には理解があ
るんだ。というより、女は社会に出て働く
べきなんだよ。共稼ぎには大賛成さ」

と言いながらガツガツと食べる。

そこに新たな料理がくる。

加奈、呆れたように、

加奈 「ずいぶん食べますね？」

小島 「だって割り勘でしょう？ たくさん食
べなきゃ損じゃない。僕ねえ、こんな時は

いくらでも食べられるんだ。キミも食べない
いと損しちゃうよ」

と言いながらメニューを開き、

小島「すみませくん！」

と店員を呼ぶ。

加奈、カメラ目線になり「こいつもダメ
だ！」と顔をしかめる。

○シティホテル・室内

セックスを終え、霧子と村上が服を整え
ている。

霧子「ねえ？」

村上「ん？」

霧子「わたしたちのこと考えてる？　これか
らのこと……」

村上、フツと笑顔になり、

村上「考えてるよ、もちろん。当然だろう」

霧子「どんなふうに？」

村上「だから結婚のことさ。このままずるず
ると付き合っていていいわけではないと思っ

「たんだ」

霧子「じゃあ……?」

村上「ああ、そのつもりだ」

嬉しそうな霧子。

村上「ただ、だからといって、すぐってわけにはいかないぞ。いろいろやらなきゃいけないことだってあるし」

霧子「もちろん!」

と村上に抱きつく。そしてカメラ目線になり、そっと親指を上げる。

○麻美の部屋（夜）

部屋の隅にうずくまる麻美。

その麻美を卓也が蹴る。

麻美「やめて!」

卓也「（強く）ああっ? 口答えをすんなよ!」
と頭をはたく。

麻美「なんでぶつの? 話し合おうって言っ

ただけなのに……」

卓也「なんだとおお!」

と更に激高し、襟を掴み、ずるずると部屋
の中央に麻美を引きずりだす。

卓也「誰に向かって口きいてんだよ！ 話し
合おうとか偉そうな口きいてんじゃねえ
よ、テメーはよ！」

と蹴りを入れる。

× × ×

麻美と卓也がセックスをしている。

卓也は麻美を優しく扱い、心から自分の
行為を後悔しているよう。涙さえ卓也は
流している。

卓也「ゴメンな。俺、どうかしてた。もうし
ないから。ホントにごめん」

麻美、抱かれながら静かに涙を流す。

○加奈の住むマンション・廊下

霧子と田中幸太郎（35）が並んで歩いて
いる。

幸太郎は愛嬌のある顔立ち。ただ、かな
り太っていて汗だくである。両手に大き

な買い物袋をさげている。

対して霧子は手ぶら。

二人、加奈の部屋の前まできて、

霧子「幸太郎クン、ここここ、ここが加奈の部屋」

○加奈の部屋・中

加奈、麻美がすでにいる。

そこに入ってくる霧子と幸太郎。

加奈「すいませ〜ん！ 重たかったでしょう」

幸太郎「いえいえ、大丈夫です。重たい物持

つの慣れてるから」

霧子「幸太郎クンは工場で働いてるんだもんね？」

幸太郎「うん」

と嬉しそうに言い、部屋の中を見回す。

霧子「あのさ幸太郎クン、女の子の部屋、あ

んまりジロジロ見るもんじゃないよ」

幸太郎「ああゴメン。なんか……あの」

霧子「安心した？」

幸太郎「え？」

霧子「あたしがホントに女の子と遊んでて。

（加奈や麻美に）ねえ聞いて、幸太郎クン
ね、あたしが女同士で部屋飲みするって
言っても信じてくれなかったんだよ」

幸太郎「（慌てて）いやいや信じてたよ。僕は
キリちゃんの言うことを疑ったりしない
から！」

霧子「ホントおお？」

幸太郎「うん」

と顔を赤らめる。

霧子「でもまあとにかく、幸太郎クン、ご苦
労様。運んでくれて助かった。後はさ、ホ
ラ女同士の飲み会だから……ね？」

幸太郎「うん、わかった。これで帰るよ」

○同・玄関・中

玄関のドアを開け、幸太郎が出ていく。

幸太郎「じゃあ、帰ります」

加奈・麻美「お疲れさまです！」

霧子「ありがとね、幸太郎くん」

幸太郎、嬉しそう。

幸太郎「じゃあねキリちゃん、楽しんで」

ドアを閉める。

加奈と麻美、幸太郎が立ち去ったことを

確認し、

加奈「ちよつと霧子、どういうこと？」

霧子「なにが？」

麻美「だって二人に絞って、あとは切ったつて言ってたじゃない？」

霧子「幸太郎くんは友だち。友だちは切るも

なにもないでしょう？」

加奈「でも、向こうはそう思っていないから」

霧子「でも、してないよ」

加奈「やっぱ基準はそこ？」

霧子「そりゃそうでしょう？ 幸太郎くんは友だち。だから切るとかそういうのは無いの。で、切ったのはしょーもない二人の男」

キッパリと言い切る霧子。

加奈と麻美は呆れて物が言えない。

○同・居間（夜）

三人で飲んでいる。

霧子が、うねうねと動くバイブを手にし
ている。以前のよりも太くて長い。

霧子「ねえ、これ入るの？」

加奈「そりゃ入りますよ」

麻美「痛くない？」

加奈「痛かったら入れないって」

霧子「そりゃそーだ。で、どんな具合？」

加奈「うーん（と首をひねり）これ自体は普通かなあ。こういうのはさ、その場の勢いだから。『こんなの入れちゃってる！ わたしいい！』みたいに自分で盛り上がりちやったりしてさ。鏡とか見ながら」

麻美「（驚いて）鏡見ながらしてんの？ 自分
のしてるトコを？」

加奈「まあね。けっこう燃えるのよ、これが」

霧子「完全にオナニストだね」

加奈「その言い方やめて」

霧子「しかもプロ。プロのオナニスト」

加奈「プロじゃないっの。それで収入得てるわけじゃないんだからさ」

麻美「でもさ加奈、来週またデートするんでしょ？　新しく婚活パーティーで知り合った人と」

加奈、急にモジモジとはにかみだし、
加奈「うん。なんか今度の人は良さそうな気がするんだ」

○オープンカフェ・テーブル（加奈の回想）
お洒落な通りに面したオープンカフェ。
加奈と松木貴志（35）がお茶をしている。
松木はスーツ姿で正統派のイケメン。

加奈「ゲストハウス……ですか？」

松木はニコリと微笑み、

松木「そう、ゲストハウス。いいと思わない？
主に外国からのバックパッカーとかを受
け入れたりしてさ」

加奈「いいと思います！」

松木「僕は英語ならそこそこいけるし、海外

も、今まで20カ国ほど行ってる。それで思っ
たんだ。僕なりのやり方で国際交流に貢献
したいななんて」

加奈「わたしも英語、けっこう好きです。た
ぶんまだまだ松木さんほどじゃないと思
いますけど」

松木「ウン。そういうのもさ、二人で協力し
ていけたらいいと思う。場所は鎌倉あたり
を考えているんだ。いい感じで東京から離
れてるし、それでいて外国人旅行者も多い
からね」

加奈、嬉しそうに松木を見る。

松木「もちろんそれなりに貯金もしてる。まあ
まだまだ足りないけどね。でも、これが僕
の夢。夢ってすごく大切だと思わない？」
加奈「(ウツトリ) 思います」

○元の居間

ウツトリとする加奈。

加奈「あたしさ、なんか小さくてもいいから、

ビジネスみたいなことやってみたかったんだ。いいと思わないゲストハウス？」

霧子「どうだか」

加奈「なにが？」

霧子「あんたオナニーはプロだけど、男を見る目は無いし」

加奈「大丈夫。もしダメな奴だったらソッコで逃げるから。でも、今度はいけそうな気がするんだ。女のカンってやつね」

霧子「(笑って) はいはい」

加奈「ていうかき、途中経過として、あたし頑張ってるって思わない？ けっこうちゃんとできてるでしょう？」

霧子「だったらあたしだって頑張ってるよ。」

二人にまで男を絞ったんだから」

加奈「幸太郎クンを残してるじゃない」

霧子「幸太郎クンは友だち。とにかくあたしだって進歩してます」

加奈「うん、まあ」

霧子「ということは……」

と霧子と加奈は麻美を見る。

麻美、困った表情でうつむく。

×

×

×

×

テーブル上に並んだたくさんの酒瓶。

酔った霧子の目が据わってきている。

霧子「麻美、あんたダメだ」

麻美「……」

霧子「そういうのをさ『でもでもだって』っていうの」

加奈「(たしなめて) 霧子」

霧子「周りが心配して、いろいろアドバイスしてるのにさ『でもくでもく』とか『だつてえく』なんて言ってばっかでなんにもしないんだ」

加奈「霧子、やめな」

霧子「ねえ、あんたホントに話し合ったの？
ていうかさ、暴力野郎と話し合いなんかになるの？
そういう奴って絶対に直らないよ。だって、そいつクズだもん」

麻美「なんでそんな言い方するの？」

霧子「事実クズだから。それで、そんな男と別れられないあんたも大バカもんだよ」

麻美「でも……」

霧子「ほら、『でも』って言ったあ！」

と膝立ちになって怒鳴る。

霧子「そんなんだからダメなんだよ。ケリを

つけなよ！ 前に進みなよ！ そんな男、

追い出しちやいなさいよ！」

今にも掴みかかりそうな勢いの霧子。

加奈は、そんな霧子を必死に止める。

加奈「ちよつとやめなつて！ 麻美、今日の

ところはもう帰ったほうがいいよ」

麻美「う、うん」

○同・玄関・外

出てくる麻美。

それを見送って加奈も出てくる。

麻美「じゃあ」

加奈「うん」

加奈、歩きだす麻美の背中に、

加奈「ねえ麻美」

麻美、振り返る。

加奈「あたしもその男はムリだと思う」

麻美「……」

加奈「好きなのはわかるけどさ」

麻美、何も言わず背を向け、帰っていく。

○ 同・居間

加奈と霧子がだるそうにしている。

霧子「……ごめん」

加奈「あたしに謝ったって意味ないよ。ちやんとあとで麻美に謝るときなよ」

霧子「うん」

ボンヤリとする二人。

加奈「霧子さ」

霧子「ん？」

加奈「幸太郎クン、どうするつもり？」

霧子「どうするって？」

加奈「わかってるんでしょ？ あの子マジだよ。可哀そうだよ」

霧子「……………」

加奈「ちゃんとしてあげな。もう連絡とらな
いほうがいいって」

霧子、ふうとため息をつき、

霧子「そだね」

とスマホを手に取り操作する。

霧子「ブロックしたし、連絡先も消した。こ
れでいい？」

とスマホを加奈に見せる。

加奈「うん」

霧子「さ、あたしも帰ろ」

○麻美の家・キッチン（夜）

麻美が帰ってくると、鬼の形相の卓也が
いる。

麻美「卓也……………今日は遅くなるって……………」

卓也「予定が変わったんだよ。するとなにか？

お前は、俺が遅い時はいつも遊び歩いて
たつてことか？」

麻美「遊び歩いてたんじゃなくて、前にも言っ

た大学の時の友だちと――」

卓也、最後まで聞かずにいきなりビンタ。

卓也「うるせえ！ 言い訳するな！」

麻美「言い訳じゃなく説明を――」

またビンタ。

麻美「ぶたないで。殴られたくない！」

卓也「ああ？ 偉そうな口をきくな！」

足をかけられ、麻美は床に倒れる。

麻美「やめて。話し合おうよ」

卓也「話し合い？ テメーが俺と何を話し合

うんだよ？ 調子に乗るな！」

と殴る蹴るの暴力を振るう。

麻美、されるがままになっている。が、

その顔はどこか醒めている。

○加奈の部屋・居間（夜）

加奈が、後片付けをしている。

途中でその手を休め、何事かを考える。

○霧子の部屋（夜）

シャワーを浴び、パジャマに着替えた霧子。鏡の前に座り、スツピンの自分の顔をじっと見つめる。

○繁華街（日替わり）

霧子が歩いている。

と、視線の先に竜平が若い女と腕を組んで歩いているのを見つける。

竜平は（マズ！）という表情で組んだ腕を振りほどく。

霧子「何してんの？」

竜平「何って、歩いてんの」

霧子「その子はだれ？」

竜平「友だち」

霧子「友だちと腕組んじゃうんだ。そういうのよくないと思うよ」

竜平「なんで？」

霧子「だって、これからのこといろいろちゃんとしていこうって話し合ったばっかじゃん」

竜平「これからのこと？」

霧子「(ムツとして)だから、この前の話！ 忘れちゃったの？」

若い女「ねえ竜ちゃん、この女なに？」

竜平「いいから」

竜平、霧子の腕を取り、女から離れる。

竜平「(小声)お前、まさかこの俺と結婚する気でのいるの？」

霧子「……………」

竜平「そんなわけねーから。てゆーか、結婚しようなんて俺、一言も言ってねえよな」

霧子、竜平を睨む。

竜平「マジか？ お前、頭湧いてんじゃねーの？ お前と結婚なんかするわけねーだろうよ！」

霧子「……………わかった。あたしもその方がいいんじゃないかと思ってたんだ」

竜平「だろ？」

霧子「“年貢”って言葉も知らないようなバカと結婚したら、先が思いやられるもん」

竜平、不思議そうな表情。

竜平「お前、なに言ってるの？」

霧子、背を向けると、返事をせずにずんずんと去っていく。

○喫茶店・中

向かい合って座る霧子と村上。

テーブルの上には興信所が調べた霧子の行動記録。

霧子は、その表紙をボンヤリと眺める。

霧子「わたしを調べたってこと？ 興信所を使って」

村上「当然だろう。結婚するんだよ。相手のことを調べるのは当たり前のことだ。僕はね、妻になる女性には、なによりも誠実さを求めているんだ」

霧子「……」

村上「残念だよ。キミが二股をかけてたなんて。悪いけど、キミには僕の妻になる資格はない」

霧子「……………」

村上「まあそういうことだ。費用もかかったし、本当は慰謝料が欲しいところなんだけど、それはまけとくことにするよ」

と書類を片付け、帰り支度を始める。

村上「これでおしまい。悪いけど、もう付きまとわないでくれるかな？」

黙って聞いていた霧子、フツと口を緩め笑う。

霧子「……………付きまとわないよ。そんなことするわけではないじゃん」

村上「？」

霧子「ていうかさ、二股じゃなくて四股だから。4.5股かな？ してない子もいたから」

村上「……………」

霧子「(笑って)良かったよ。あっちの相性最悪だったもんね。ていうかさ、結婚するならセックスが嫌いな女としたほうがいいよ。あんた下手くそだし」

村上、ムツとした表情で立ち上がり、

村上「お前、サイターの女だな」

と出ていく。

残された霧子、すぐにスマホを手に取り、幸太郎に連絡を取ろうとするが、連絡先が出てこない。

霧子「そっか。消したんだっけ」
とスマホを放り出す。

○高層ビルの最上階にあるバー・中（夜）

窓から見える夜景が美しい。

加奈と松木がカクテルを飲んでいる。

加奈「30万円？」

松木「うん、そう」

加奈「貯金が？」

加奈は、「ウソでしょ？」という表情。

松木は大マジメな顔。

松木「そう貯金が30万円。多くはないけれど、三十代の独身男性としては、決して少ない額だと思っている」

加奈「……………（啞然）」

松木「それに鎌倉は田舎だからね。土地も安いだろう。おそらく東京の三分の一もしないんじゃないかな」

加奈、首をブルブルと振る。

加奈「いや、そんなことはないと思う。鎌倉はそこそこしますって」

松木「(笑って)いやあ、それはない。東京から一時間以上離れてるんだよ。田舎の土地が安いなんて常識でしょう？」

加奈「……鎌倉は人気だから」

松木「だとしてもさ、二人でお金を出し合えばいいんだよ。夫婦になるんだよ。二人でお金を出し合って土地を買おうよ。それで二人でゲストハウスをやろう！」

加奈、まるで宇宙人を見るかのような目で松木を見る。

松木「どうしたの？ 夢を追おうよ。僕たちのドリームだよ。ドリームはインポートでしよう？」

加奈「？ インポート？」

松木「重要ってこと。夢はとっても大切だつて言ったの。ドリームはベリーインポートなんだからさ」
と大マジメに言い切る。

○夜道

加奈が一人でずんずんと歩いている。その表情は怒りでいっぱいだ。

加奈「インポートは「輸入」だっつーの！
なーにがそこそこ英語はできるだよ。バカ！
出川未満じゃねえか」

加奈「頭をガシヤガシヤと掻きむしり、
加奈「なにが「女のカン」だ。あたしの女の
カンはもう腐ってたんだな。あーもう！」

○加奈の部屋・居間（夜）

座卓に座る加奈。ローテーブルの上には
パソコン。

その画面には様々なバイブが並んでいる。
加奈、いくつかをカゴに入れ『購入』を

クリック。

加奈「怒りのやけ買いじゃ！」

そして天井を見上げ、

加奈「男なんかいらんわああああ！」

○麻美の住むアパート・キッチン（夜）

麻美、挑むような顔。

その向かいに卓也。二人は、睨み合って立っている。

卓也「なんだその顔は？」

と麻美をビンタ。

麻美「暴力はやめて」

卓也「ああっ？」

麻美「もうぶたれたくない」

卓也「この野郎！」

と麻美を掴もうとする。

が、麻美はそれをスルリとかわし、テーブルの反対側に回り込む。

麻美「どうして暴力なの？　なんで話し合ってくれないの？」

卓也「てめえ、誰に向かって口きいてるつもりだ？」

と猛烈な勢いで掴みかかってくる。

麻美、その寸前でフライパンを掴み、防御の態勢。

卓也、一瞬ひるむが、すぐにまた虚勢を張る。

卓也「てめえ、俺様に対してそういう態度を取るってことは覚悟ができてるってことなんだろうな？」

麻美「うるさい！」

とフライパンを振ると、見事にそれが卓也の頭にヒット！

卓也「痛！ 何すんだよ！」

麻美「黙れ！」

とバンバン叩く。

うづくまる卓也。

麻美はのしかかり、卓也を叩きまくる。

麻美「何が俺様だ！ あんたなんかロクなものじゃないじゃないか！ 女を殴るしか

できないダメ人間のくせに！ 男らしい
を威張ることと勘違いしてる大バカ野郎
だ！ ホントは小心者の、女にしか威張る
ことができないウシコ野郎のくせに！」

卓也、体を丸め、反撃できない。

卓也「（小声）……やめろよ」

その時、ドアをガングンと叩く音と、「ダ
イジョーブですか！」という外国人女性
の声が聞こえてくる。

女性の声「警察ヨビマショーカ？」

麻美「（大きく）大丈夫ですから！」

立ち上がる麻美。見下ろすと、ボロボロ
になった卓也がいる。

身を起こそうとする卓也。

麻美が威嚇でフライパンを振り上げると、

卓也「ヒッ！」

と怯えて頭を守る。

麻美、玄関に行きドアを開ける。

そこにはフィリピンやタイの女性らが四
人ほどいる。彼女らは手に棒やハンガー、

鍋などを武器として持っている。

女A「ダイジョウブ？」

女B「アナタ、イツモ暴力振るわれてたでしょ？ 助けてあげられなくてゴメン」

麻美「（ニッコリ）大丈夫。勝ったから」

卓也、フラフラと立ち上がる。

麻美「（卓也に）おい出てけよ」

卓也「いや……でも……」

麻美「（強く）ああっ？」

とフライパンを振り上げる。

卓也、ビクツと怯え、

卓也「けど……」

麻美「けどじゃねえんだ、こらあ！ あたしが出て行ってっただから出てきやいい

んだよお、このウンコ野郎がああ！」

女C「ソウダ、ウンコ出てケ！」

女D「ウンコ、ウンコ！」

麻美、卓也の肩を掴み、

麻美「ホラ！ 出ろっつってんだから出ろ！
そんで二度とここに来るな！」

と卓也を蹴りだす。

女の子たち「ウンコ、ウンコ！　ウンコ出る！

ウンコ出る！」

卓也、逃げるように出ていく。

女A「ダイジョウブだった？」

女B「グッジョブ！」

と親指をあげる。

麻美「ありがとう」

笑顔で答える麻美。ただその表情はどこか固い。

玄関のドアを閉め、部屋に戻る麻美。

荒れた部屋を見まわし、そして涙を流す。

やがて肩を震わすほどの号泣となり、床に座り込んで大声で泣く。

○とあるバー（夜）

霧子が一人でカウンターに座りカクテルを飲んでいる。

少し離れたところに座る男と視線が合う。

なんとなくいい予感。

が、すぐに女性がやってきて、その男の隣に座り話し始める。

霧子、肩をすくめ、ため息をつく。

○加奈の部屋（夜）

オナニーを終え、ゴロリと寝転ぶ加奈。

あたりを見回すと、パイプがごろごろしている。

加奈「あくあ」

と大きなため息をつき、天井を眺める。

○霧子の住むマンション・霧子の部屋・外（夜）

霧子が帰宅してくる。

と、ドアの前に幸太郎がいる。

霧子「……幸太郎クン」

幸太郎「（固い笑顔）久しぶり」

霧子「どうしてここを？」

幸太郎「ごめん。俺、前からキリちゃんの部屋知ってたんだ。ずっと前……その、後つけたってわけじゃないけど、キリちゃん見

かけたことがあって……その、ごめん」

霧子、クスリと笑い、

霧子「いいよ。で、どうしたの？」

幸太郎「あの……急に連絡取れなくなったから。もちろん、ブロックされたんだろ
うってことはわかったんだけど、でも、一度
度キリちゃんの口からはっきりと言われ
たかったから……」

霧子「はつきりね……何を言えればいいの？」

幸太郎「俺、キリちゃんのことを好きだ。でも、
キリちゃんが他に好きな男がいることはわかってる。
だから、はつきり俺じゃダメなんだって
引導を渡してもらいたいだ。キリちゃんから
はつきりフラれたいんだよ。……ゴメン、
勝手なこと言って」

霧子「ううん」

と首を振る。

が、すぐに顔を真っ直ぐあげて、

霧子「聞いて。あたしき、他の男と付き合っ
てたんだ。四人の男と。幸太郎くんを入れ

ると五人。でも、幸太郎クンとはしてな
かったよね。でも、他の四人とはしてた。
酷いよね、あたし」

幸太郎「……………」

霧子「こんな女にフラれる必要なんかないよ。
だって最低の奴だもん、あたし。計算ばっ
かして……………ホントは計算なんてできない
くせに」

幸太郎「そんなことない」

霧子「で、いろいろちゃんとしようと思った。
ちゃんと人間関係を整理しようと思った。
だから幸太郎クンとも連絡を取らないよ
うにしたの。ゴメンね」

幸太郎、笑顔になり、

幸太郎「そっか。じゃあキリちゃんは幸せに
なれたんだ。おめでとう」

霧子、涙を流し、

霧子「なれるわけないじゃん！ 人間関係を
整理するとか言ってる女が幸せになれる
わけないじゃん。こっちが整理されちゃっ

たよ」

幸太郎「キリちゃん……」

霧子「でも、幸太郎クンもこれで良かったんだよ。あたしみたいな最低の女と別れられてさ」

幸太郎「そんなことない！　俺、キリちゃん
のことが好きだ」

霧子「ねえ聞いてた？　あたし幸太郎クンを
入れて五人の男と付き合ってたんだよ。そ
んな女イヤでしょ？」

幸太郎「でも、それって今は誰とも付き合っ
てないってことでしょうか？」

霧子「そりやそうだけど、よく聞いて――」

幸太郎「(かぶせて)俺、キリちゃんのこと
が好きだ！」

霧子「……あたし遊んでたよ。今までたくさ
ん。経験人数だって30人とか……いや50人
くらいいるかも。そんな女ヤでしょう？」

幸太郎「過去のことなんてどうでもいい。俺、
キリちゃんが好きだ！」

と霧子の腕を掴もうとする。

霧子、逃げるように玄関の中へ。

それを追う幸太郎。続いて中へと入って
いく。

○霧子の部屋・リビング

霧子がリビングに入ってくる。

その後が続いて幸太郎。

霧子、幸太郎に背を向けている。その肩
が震えている。

霧子「なんで、好きとか言うの？」

幸太郎「だってキラちゃんのが好きだから」

霧子「（涙声）……ダメだよ。そんなの反則
だよ。人が弱ってるときにさ……そんな
優しいこと言われたら……ズルいよ幸太
郎クン」

幸太郎「反則でもズルくても、俺はキラちゃん
のことが好きだ！」

と背後から霧子の両肩を掴み、自分の方

へと向ける。

振り向いた霧子。涙をポロポロと流している。

対照的に幸太郎はニコニコと笑顔。

霧子「（泣き笑い）なんで笑ってるの？」

幸太郎、室内をグルリと見回し、

幸太郎「ドサクサに紛れてキリちゃんの部屋にあがっちゃった」

と嬉しそうに笑う。

霧子「バカ」

二人、キスをする。

そのままベッドへ。セックスを始める。

意外にも幸太郎はテクニシャンで霧子はよがりまくる。

×

×

×

×

行為が終り、二人がベッドの中でグッタリとしている。

霧子、幸太郎のぷよぷよとした腹を撫で、

霧子「ねえ幸太郎クン？」

幸太郎「なに？」

霧子「ダイエットとかする気ある？」

○麻美の住むアパート・麻美の部屋・外（夜）

麻美が帰宅してくる。

と、ドアの前で体育座りをしている卓也の姿がある。

驚き、立ち止まる麻美。

卓也、立ち上がり、

卓也「麻美：……」

麻美、卓也を押しつけドアノブに手をかける。

麻美「（強く）どいて」

卓也「あ」

と官能的なため息。

麻美、ちよつと不思議そうな顔。だがすぐに強気な姿勢に戻り、

麻美「話すことないから」

とドアを開け、玄関に入っていく。

○同・中

卓也、麻美の腕を掴み一緒に入ってくる。

卓也「頼む、麻美。話を聞いてくれ。悪かった。俺が悪かった。麻美に言われて目が覚めた。俺、男らしいを勘違いしてた。ホントの俺は小心者で、女にしか威張ることのできないウンコ野郎だった」

麻美「（冷たく）だから？」

卓也「もう一度チャンスをくれ。俺とやり直そう！目が覚めた。麻美、お前が俺の目を覚まさしてくれたんだ」

麻美「はいはい。じゃあ次の女の子に優しくしてあげなよ。あたしはあんたのこと完全に見限ってるから。（強く）あんたは最低っのクズ野郎だって！」

卓也、感極まったように目を閉じ天井を見上げる。その表情は、どこか恍惚としている。

麻美は意味がわからない。

麻美「とにかくさ、もう付きまとわないで」

卓也「（情けない声で）麻美、そんなこと言わ

ないでさ……」

と麻美にすがる。

麻美「触らないで！」

と強く突き放す。

卓也「ああ！」

とまた歓喜の雄叫び。

麻美「……？ なんなのそれ？ 気持ち悪

いなあ」

卓也、「気持ち悪い」と言われ気持ち良さ

そうな表情。

麻美、マジマジとそんな卓也を見る。

麻美「なにそれ？ どういうこと？」

卓也「もつと……」

麻美「もつと？ もつとなに？」

卓也「もつと……罵って」

麻美「はああああ？ 目覚めたって、そっち

に？ 気持ちワル！ ド変態じゃん」

卓也「（歓喜）あああああっ！」

麻美、卓也の下半身を見る。

明らかに卓也は勃起している。

麻美「なんで勃ってるの？ 気持ワル！」

卓也「あああああっ！」

麻美「なんなの？ 目覚めたからいじめてく
ださいって言ってるの？」

卓也「俺、麻美に殴られ、罵られて、本当の
自分に気付いたんだ。俺は、最低で醜いク
ズのような男だって。だから、俺をもっと
罵ってくれ」

麻美「いや、ムリでしょ！ なんなのこのへ
ンタイ！」

卓也「あああっ！」

と歓喜に震え、床に崩れ落ちる。

卓也「もつと、もつと俺を罵ってくれ！ 生
きる価値のない、ブタのような俺をさげす
んでくれえええ！」

麻美「いやいやムリだから。ていうか変態に
用はないから帰って！ ったく気持ち悪
いな、このクソブタがあああ！」

卓也「あああああっ！」

歓喜で床をのたうち回る卓也。

麻美は、その間抜けな姿を見て、思わず笑ってしまった。

麻美、しゃがんで卓也に顔を近づけ、

麻美「おい変態野郎、罵られて勃起するって
どういうことだ？」

と言いながら卓也の下半身をまさぐり、

卓也のペニスを引っ張りだす。

麻美「ここでじぶんでしな」

卓也、嬉しそうな切なそうな表情。

卓也「で……でも」

麻美「しろ。この変態野郎」

卓也、オナニーを始める。

麻美「(軽蔑の目)うあああ、命令されてオナ
ニーしてる。気持ち悪いいい」

卓也、ペニスをしごきながら、

卓也「麻美、本当に悪かった。オレはとんで
もない大バカ野郎だった。許してくれ」

涙を流しながら詫びる卓也。

麻美は、そんな卓也を見てしんみりとし
た表情。

が、同時にペニスをしごく卓也の手がど
んどん速くなっている。

麻美「ねえ、ひよっとしてイキそうなの？」

卓也「う、うん」

麻美「ホントに？ ホントにイキそう？」

卓也「うん、イク」

麻美がガツと卓也の手を押さえ、

麻美「はい、じゃあここでおしまーい。イツ

ちやだめえええ！」

卓也「そ……そんなあ」

麻美「勝手にイツたらダメでしょう。そうい

うトコだよ。あたしはどうなるの？」

と卓也にのしかかりキス。そして卓也の
手を取り、自分の胸や股間に導く。

麻美「早く触って」

夢中になり麻美の体をまさぐる卓也。

麻美「あたしは痛いイヤだから。もっと優
しくしなさい」

と言いながら上から何度もキス。

×

×

×

×

ベッドで麻美と卓也がセックスをしている。麻美は完全にノリノリで、「もっと腰振って」とか「自分ばっか気持ち良くなつてどうすんの」なんて100%麻美主導のセックスをする。

○加奈の部屋（夜）

仏頂面の加奈。

手にしたバイブを手に不満げな表情。

加奈「まったく、どれもこれも」

と室内を見まわす。

散乱した小さな箱や包み紙。

加奈「（ため息）あーあ、オナニーグッズのやけ買いとかするもんじゃねえな」

スポーツバッグから、それまで買い集めたバイブ類を引っ張り出す。

×

×

×

×

部屋中に並んだおびただしい数のオナニーグッズ。呆れた表情で加奈がそれらを見回す。

加奈「それにしても……」

と部屋の一角を見回し、

加奈「我ながらよくもまあ……」

とまた別の一角を見る。

加奈「こんなにいっぱいあってどうすんの？」

がしかし、徐々に加奈の目が輝いてくる。

徐々に、本当に少しずつその瞳に力がこ

もってくる。

加奈「そうだ！」

と立ち上がる。

加奈「やるぞお！ やるぞお！ （大声）やっ

てやるぞおおおお！」

両手にバイブを持ち、それを高々と天に

掲げる。

加奈「男がなんだあああ！ 裸一貫、やって

やろうじゃないかああああ！」

字幕 一年後

○女性専用アダルトショップ『ピュア』・前

マンション内にある店舗。
開いた扉に『PURE』の看板。
他に「女性専用」とか「カップルであつても男性の立ち入りはできません」などの注意書きが張ってある。

○同・店内

清潔で洒落た室内。棚にはあらゆるタイプのバイブなどのオナニーグッズが並んでいる。

一人の女性がバイブを買い、レジで精算している。

レジにいるのは加奈だ。

加奈、おつりと商品を入れた袋を渡し、

加奈「ありがとうございます」

その客が出ていく。

レジの後に小部屋があり、その扉が開く。

霧子が顔だけを覗かせ、

霧子「お客さん、帰った？」

加奈「うん」

霧子に続いて麻美も顔を見せる。

麻美「梱包できたからさ、発送に行ってくるよ」

加奈「ホント？ いつも悪いね」

霧子「いいっていいって。お店が軌道に乗るまで、いくらでも手伝っちゃうから」

小さなダンボール箱がたくさん詰まった紙袋を両手に持った霧子と麻美が小部屋から出てくる。

麻美「帰りにビール買ってくる。それで乾杯しようよ」

加奈「うん！」

× × × × ×
夜。

三人の声「(合わせて) 乾杯！」

缶ビールを合わせる加奈、霧子、麻美。

霧子、室内をグルリと見回し、

霧子「それにしてもすごいよね。まさか加奈が社長になるなんて」

加奈「結局あたしはさあ、何かビジネスをや

りたかったんだと思う。男じゃなくてさ。
今まではなんか男にくっつけば、道が開けるみたいになってたけど、そうじゃなかったんだってわかった」

麻美「で、始めたのが女性専用のアダルトショップと」

霧子「まさに天職だよね、オナニストの」

加奈「(笑って)その言い方やめて。CEOって呼んでくれる？」

霧子「オナニスト兼CEOでいいじゃない。それにしてもたいしたもんだよ」

と室内を見まわす。

麻美「やっぱり」お試し制度”っていうのが良かったのかな？」

加奈「たぶんね。だって恥ずかしい思いして高いバイブ買っていまいちだったら悲しいじゃない。だったらお試しで使ってみて、自分に合ってたら買えばいいって閃いちちゃったんだよね」

霧子「でもさ、そのお試しのグッズ揃えるの

だってけっこう掛かったでしょ？」

加奈「そうでもないよ。お試しバイブは全部あたしのだもん。やっぱCEOとして全部試してみないとね」

麻美「(驚いて)ここにあるやつ、全部使ってみたの！」

霧子「やっぱプロだよ。あんたプロのオナニストだ」

麻美「でも、ホントすごいよ。通信販売から始めて、こんな風に実店舗を持つまでになったんだから」

加奈「ありがと。ていうかさ、あたしより麻美はどうかなの？ 本当に大丈夫なの？」

麻美「(キツパリ)うん」

霧子「じゃあ結婚するんだ？」

麻美「する。いろいろ心配してくれてありがとう」

霧子「それはいいけど、本当の本当に大丈夫なのね？ この一年間、一度も暴力ふるわれてないのね？」

麻美「うん、大丈夫」

加奈と霧子、クスクスと笑い出す。

加奈「それにしても麻美に殴られて目覚め
ちゃったってすごいよね。もうすっかり従
順？」

麻美「なんでも言いなり」

霧子「あっちも？」

麻美「（ニツコリ）もちろん」

○麻美の部屋（回想）

麻美と卓也がセックスをしている。

卓也にクンニをさせるなど、あれこれ指
示を出しながら麻美は気持ちよさそう。

○元の『ピュア』店内

麻美「なんか奉仕するのが好きみたい。お金の
管理もあたしがしてるんだけど、お小遣
い月に2万でいい？って聞いたら、自分か
ら1万円でいいって言ってきたの。なんか、
あたしの為に耐えるのが嬉しいんだって」

霧子「変われば変わるものねえ」

加奈「そういう霧子はどうなの？ 幸太郎クンとうまくいってるの？」

霧子「まあまあうまくいってますよ」

麻美「結婚は？」

霧子「結婚はねえ……」

と首をかしげる。

加奈「なんで？ いい人なんでしょ？」

麻美「体の相性もいって言ってたじゃない」

霧子「（強く）うん！ 体の相性はバッチリ！」

○霧子の部屋（回想）

霧子と幸太郎が激しいセックスをしている。二人とも気持ちよさそう。

○元の『ピュア』店内

霧子「（ウツトリ）けっこういいモノを持ってるんだよねえ、幸太郎クン」

加奈「じゃあ、なんの問題があるの？ 工場に勤めてるっていつでも大企業だし、収入

もなかなかなんでしょう？ 性格も良く
てさあ」

霧子「だから顔がさあ……いまいち好み
じゃないんだよね」

麻美「（絶句）顔お？」

加奈「いいじゃん顔なんて。そんなのすぐに
慣れるよ。お金があって、優しくて、霧子
のことが大好きで、あっちもいい。贅沢
言ってる場合じゃないって！」

霧子「いやいやいや、顔は大事。だって
毎日見るんだよ。もう幸太郎クンに整形し
てもらおうかな」

加奈・麻美「（同時に）整形！」

麻美「そこまで言う？」

加奈「あんた人として間違ってるよ」

霧子「いいじゃない。ここで言うくらい
さ。それにさ、あたしそれまで四股かけて
たんだよ。幸太郎クンも入れたら五股。そ
のあたしが、この一年間ずっと幸太郎クン
一筋。これってすごくない？」

麻美「まあそりゃあね……」

加奈「確かに」

霧子「だからさ、あたしもあんたたち二人に
負けないくらいちゃんとしたんだよ。そう
思うでしょう？」

と胸を張って加奈と麻美を見る。

加奈と麻美、クスクスと笑い出す。

その笑いが霧子にも伝染し、三人で笑い
合う。

加奈「うん、確かに。三人ともけっこうちゃ
んとしてきたと思う」

麻美「そうだね、前に比べたら大進歩だって」

霧子「でしょ？ よし、じゃあさここまでの
頑張りど、更にちゃんとすることを目指し
てもう一度乾杯しようよ」

加奈「そだね！」

麻美「賛成！」

三人、缶ビールをそれぞれ掲げ、

霧子「いいですか？ 皆さん？」

うなづく加奈と麻美。

霧子「わたしたちはこの一年半、ずっとがんばってちゃんとしてきました！」

加奈・麻美「ちゃんとしてきました！」

霧子「でもまだまだ完璧じゃありません。これからわたしたちは、もっともっとちゃんとしていきます」

加奈・麻美「ちゃんとしていきます！」

笑顔でお互いを見る三人。

霧子「それでは――」

三人「乾杯！」

おしまい